

平成24年産輸りんごの総括と今後の戦略

青森県りんご輸出協会
事務局長 深澤 守

はじめに

このたび「平成24年産輸りんごの総括と今後の戦略」というテーマで執筆依頼をいただきました。筆者は平成24年の6月から青森県りんご輸出協会に勤務していますが、当協会は輸出促進のための公益的事業を実施する団体で、りんごの輸出は各業者・農協等が直接行っているため、貿易の実務には携わっていません。このため平成24年産りんごの輸出の状況と今後の方向について業務の推進上で知り得た範囲でご紹介いたします。なお、本県輸りんごの9割以上が台湾向けとなっていることから、台湾市場を中心といたします。

1 台湾向けりんごの輸出動向

青森県における台湾向けりんご輸出は、平成14年の台湾WTO加盟を契機に、それまでの輸入割当制(400トンから始まって最終年は2,000トン)が廃止され、原則自由貿易となったことから順調に輸出量を増やしています。表1にこれまでの台湾向けりんご輸出量の推移を整理しています。昭和56年から輸入割当制が敷かれ、平成6年までは年間400トン、平成7年に600トン、平成8年から平成13年までは2,000トンとなっていました。2千トン時代も枠いっぱい輸出されることはなく、1,700トン程度の輸出にとどまっていました。輸入枠は台湾側で入札にかけられ、しばらくは台湾の大手貿易会社一社が独占する状況が続いていました。

平成14年1月に台湾がWTOに加盟し、輸入枠と入札制度が廃止されたことから、台湾側の多くの貿易会社が青森りんご輸入に参入しました。平成13年産は12月までは2千トン枠での貿易で、1月以降自由貿易で行われたため一気に5千5百トンと過去最高を記録し、また、平成14年産からは年間を通じて自由貿易となったため1万トンを超え、18年に2万トン、19年には最大の23,878トンを記録しています。しかし、22年産から減少に転じ、23年産では国内相場の高騰と超円高の影響を受けて、台湾がWTO加盟後初めて1万トンを割る水準まで減少しています。

以下、22年産以降の輸出減少の要因について分析してみます。

(表1)

2 輸出量減少の要因1 (円高)

台湾には、世界中から年間14万トン(22年産)程度のりんごが1年を通して輸入されています。日本産と競合するのはアメリカ(49千トン)韓国(5千トン)など北半球の国々で、南半球のチリなど一部の国でも端境期に競合しています。

青森りんごの代金決済は円建てが基本となっているので、円高の影響は台湾側輸入業

者にとっては収益性を悪化させる大きな要因となっています。ここ6カ年の台湾ドル(twd)とアメリカドル(usd)、韓国ウォン(krw)、日本円(jpy)の為替変動率を日本からの台湾向け取引の最盛期である12月1日で整理したものを図1に示しています。アメリカドル、韓国ウォンともに台湾ドルに対して安値で推移しているのに対して、日本円は平成17年対比で3割を上回って円高が進んでいる状況にあります。台湾におけるりんごの輸入量は、各産地の作柄や品質、品種構成、輸出国の相場など多くの要素が絡んで決まっており、単に為替レートだけに左右されることはありませんが、極端な円高水準は、確実に日本産りんごの競争力を失わせていることは間違いありません。昨年誕生した安部内閣が提唱するアベノミクスによって、急速に円高が是正されたものの、24年産の取引の大方が終わったあとの円安だったため、りんご取引拡大への効果は限定的だと見られています。この為替相場が25年産輸出まで継続していることに期待したいものです。

(図1)

3 輸出量減少の要因2 (高関税)

円高に加えて、台湾の貿易業者を悩ませているのが、関税問題です。日本から輸入されるりんごには20%の関税がかかっていますが、輸入単価は自主申告となっているため、これまでの申告価格は比較的低いものだったようでした。しかし、一昨年から税関当局が青森りんごの販売実態の調査を始め、仕入価格を正しく申告するよう指導が強化されています。

解り易く説明すると、これまで一箱千円で輸入したと税関に申告すると200円の関税で済みますが、税関当局から青森のりんごは高級でもっと高く取引されている、市場の調査では一箱5千円で売られているから、5千円で申告しなさいと指摘されると、関税は5倍の1千円にアップしてしまいます。結果として関税納付額が高騰して、輸入業にとっては円高と併せて二重のコストアップを招いています。実際に5倍になっているかは定かではありませんが、関係者の間では、そのような情報があります。

台湾政府は、昨年の台風災害等に伴う物価対策として昨年10月5日から12月4日までの2ヶ月間関税の引き下げ(20%→10%)を実施し、輸入りんごも対象になりましたが、実施時期の関係で大部分がアメリカ産りんごに適應され、日本りんごにはほとんど恩恵がありませんでした。

4 輸出量減少の要因3 (りんご品質等)

台湾における日本りんごは、日本では桐の箱に入ったマスクメロンのような高級感があって、年配の台湾人に話を聞くと日本のりんごは病気をした時や臨終の間際にしか食べられない貴重な存在だという話を良く聞かされます。平成14年のWTO加盟で輸入量が急増したのも、これまでの高級りんごが簡単に手に入り、良い商売につながると思われたからです。しかし、実際に取り扱って見ると、世界一、むつ、金星など当時の高級品種は生産量が少なく、外観重視でそれほど美味しくないことが、だんだん浸透していきます。2万トンの輸入を支えたのはサンふじと王林ですが、ふじはアメリカ、チリ、韓国でも輸出してくるので、大玉は別として価格競争に紛れやすく、しかも、これらの国では早生ふじも出してきたりして、総じて各国のふじの品質はアップしてきています。一方の王林は概して青いものが好まれ、黄色く熟したものは品質保持に問題があると思われて敬遠されます。結果として味が乗っていない

りんごが出回って評価を落としてしまっている状況です。

24年産はこれら長期的な傾向に加えて、早生中生の黄色品種が着色不良、未熟なものを高価格で出荷して市場関係者の青森りんごへの不信感を買っています。加えて主力のふじに入ってからには土壌菌による腐敗が追い打ちをかけて、某大手貿易業者が1月以降の取引をキャンセルする事態まで引き起こしています。

更に、懸念されるのが台湾の流通の変化です。これまでは貿易業者→市場(仲卸業者)→伝統市場・青果専門店が流通の中心であったものが、日本のジャスコ・イトーヨーカ堂などに相当する大型量販店から中小までスーパーが台頭しています。こうした量販店では日本同様に「定時・定量・低価格」が取引の基本になっていきます。日本りんごのように国内相場に左右されて輸出に回るりんごが数量も価格も安定しないとなると、量販店での扱いが難しくなってきた、アメリカ、チリなど輸出産業としてりんごを生産・流通している国とはだんだん太刀打ちできなくなってきたのではないかと見られています。

5 今後の展望

台湾におけるりんご輸出の状況を説明しました。円高や高関税、りんごの品質、流通の変化を最近の輸出停滞の要因としてあげましたが、日本のりんごにはそれ以前にモモシクイガの植物検疫の問題、残留農薬検査の問題など多くのリスクがありました。これらは輸出量を減少させる要因を構成していますが、台湾関係者の話を総合すると結局「日本のりんごを扱っても儲からない」というところに行き着くようです。某大手貿易業者によると輸出量がピークとなった19年産以降は日本産りんごで毎年赤字を出している状況とのことです。

思い起こせば、台湾市場が大きく拡大した平成14年以降は、九州市場に匹敵する新たなマーケット誕生で、国内相場形成にも大きく貢献してきた輸出市場ですから、このマーケットを絶対に手放してはなりません。生産・流通に携わる多くの青森県りんご関係者がこれまでの幾多の難局を乗り越えてきた知恵を絞り、日台のりんご関係者がお互いWIN WINの関係を構築していく必要を痛切に感じます。

青森県りんご輸出協会では台湾の主要なりんご貿易・仲卸業者を招いて23年は弘前市で、24年は台湾台中市でそれぞれ情報交換会を開催するとともに24年に新たに「台湾青森りんご友の会」を創設して、青森と台湾の情報交換を密にして青森りんごの輸出促進を図ろうとしています。皆さんとともに、2万トンの輸出回復を図り、本県りんご産業の発展に期するため、共に頑張っていこうではありませんか。

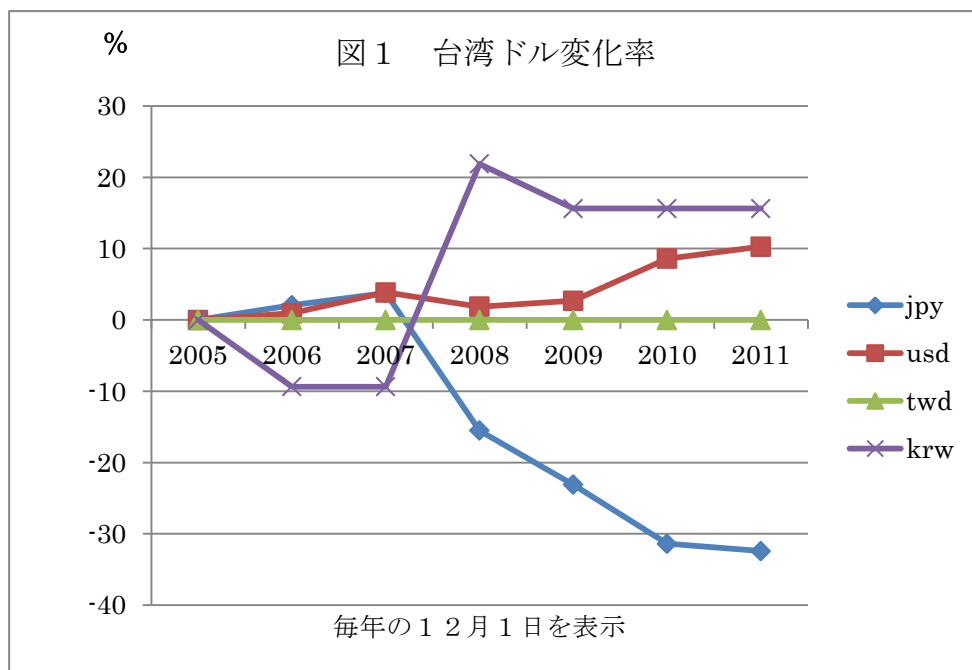
表1 輸出品の推移 (単位：トン)

年 産	台湾向け	その他の国	合 計
平成元年	400	498	898
平成10	1,756	808	2,564
平成13	5,522	871	6,393
平成14	11,213	632	11,845
平成15	14,994	664	15,658
平成16	10,125	646	10,771
平成17	18,083	816	18,899
平成18	22,318	1,080	23,398
平成19	23,878	1,619	25,497
平成20	20,498	1,756	22,254
平成21	21,656	2,211	23,867
平成22	15,912	2,028	17,940
平成23	8,457	1,410	9,867
平成24	11,667	718	12,385

(注) 15年産以降は全国値(約9割が青森産)

14年以前は青森産の推計値

24年産は2013年2月25日現在の速報値





市場ではりんごが依然として大きなウエイトを占めている
(台中市中清市場)